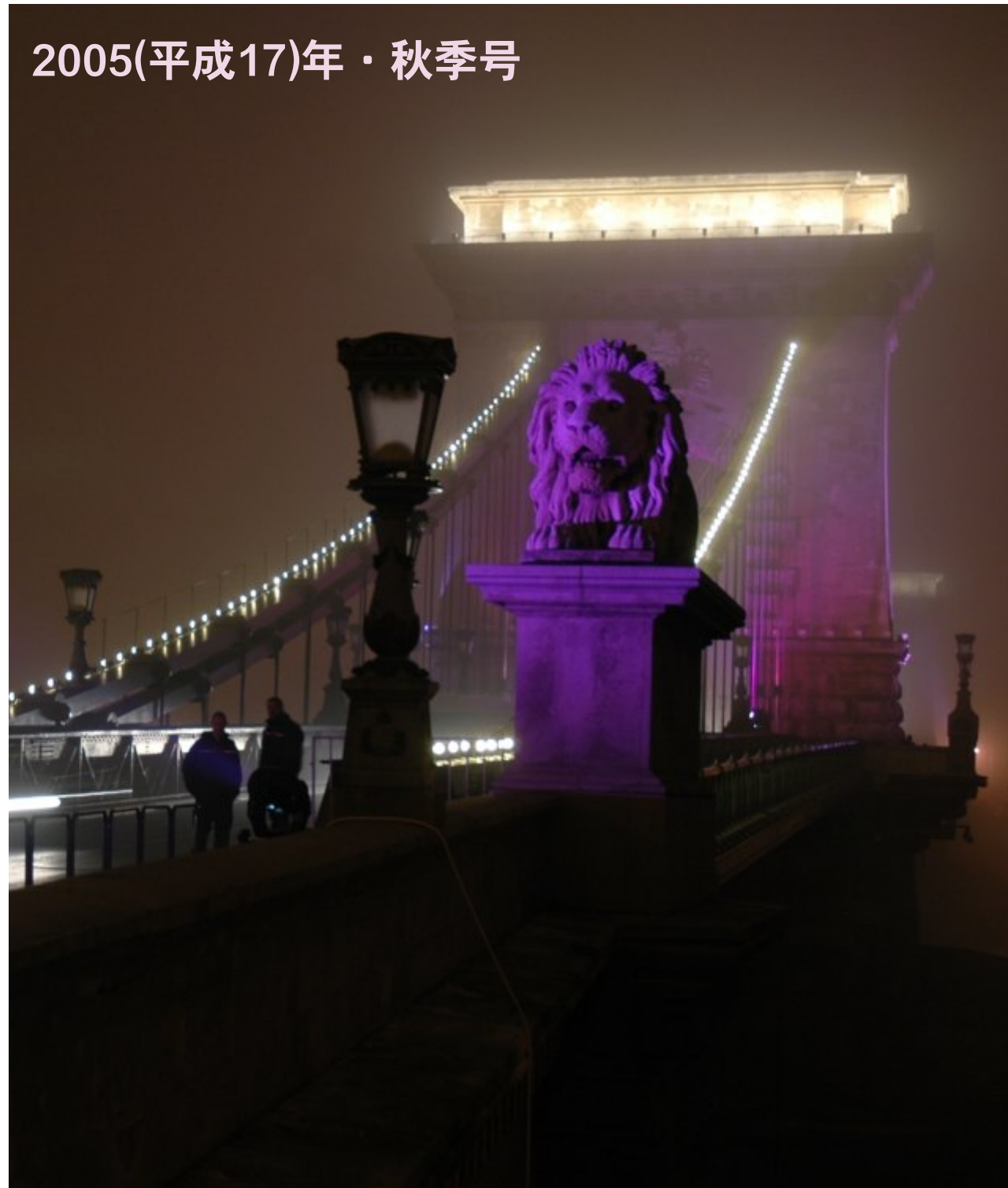


The Danube Quarterly

ドナウ通信



2005(平成17)年・秋季号



ハンガリー日本人会会報 / The Japanese Community Bulletin



October

S	M	T	W	T	F	S
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23 ₃₀	24 ₃₁	25	26	27	28	29

November

S	M	T	W	T	F	S
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

December

S	M	T	W	T	F	S
						1 2 3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

目次

特集 スポーツの秋

ゴルフも過激

飯尾 欽哉

1

ロードレースへの誘い

盛田 常夫

4

テニスサークルへの誘い

茂木・杉本・村上

8

みんなで生涯スポーツを

飯川 浩二

10

練習不足に苦しむ

菅野 修

13

ロードレースに填った私

村上 義

15

会社紹介

アルパイン (Manufacturing of Europe)

谷中 政則

18

日本人学校・みどりの丘日本語補習校児童作文

20

随想

家族で旅行

竹内 勝則

25

報告 運動会と第二回ソフトボール大会

伊藤 幸広

28

特集 スポーツの秋

ゴルフも過激

飯尾 欽哉

過激なスポーツとゴルフとを比較して、「ゴルフをスポーツと呼べるのか？」なんていう某編集長の記事を時々目にしますが、なうにゴルフもなかなかの過激なスポーツでございますよ。イギリスとかなんとか、あつち方面が発祥といわれているスポーツには、サッカーやそれから派生したラグビー、或いはクリケット、ボロなどがすぐ頭に浮かびますが、これらは結構運動量の多い過激なスポーツといえますね。で、ゴルフですが、ご承知のように、これもあつち方面がその発祥です。実は、こんなエピソードが百年ほど前の文献をひも解くと（というほど大袈裟なも

のでもないんですが）出ているそうです。

スコットランドのとあるゴルフ・コース。時は晩秋。この時期になると秋の収穫を終えた面々が三々五々集まって、ゴルフを楽しむ習わしでした。その日に集まったゴルファーはいずれも齢五〇を過ぎた男十数人。さてプレーが始まって後半戦に入つたところで急に冷え込みが来た。雨は雪となつて風も強まってくる。昔のゴルフ・コースといえば、聖地と呼ばれるセントアンドリュースを思えば想像に難くありませんが、荒涼とした野っ原そのものです。気温は急転、氷点下となる中で視界も悪くなり、流石のゴルフアー達もこのままでは危険を感じ取つたのか、「クラブハウスに引き上げよう！」と。ようやくたどり着いたハウスで暖炉を取り囲み、スコッチ片手に（余談ですが、スコッチは英語で Whisky、

アイリッシュは Whiskey と書くんですって、知ってました？）。暖をとっていたが、誰かひとり足りない。トイレ、ロツカールームにも居ない。：とすると、これは、「遭難!？」。

選り抜かれた数人が搜索隊を繰り出して、不明となつているプレーヤーを探しに行こうとしたその矢先、ドアをバウンと開け放つて飛び込んできた男がいる。髪の毛を雪で真っ白にして、口ひげからはツララが下がっている。目は落ち窪んで、まるで白クマ状態のその男の第一声。

「Out 45, in 57-」

おわかりでしょうか？今のはほんの一例です。ゴルフという競技は本来、コースがクローズしない限り、雨が降ろうが、ヤリが降ろうが、プレーをする過激で過酷なものなのです。良い天気の時だけに限つてプレーするゴルフアーは、ハンガリーの本会には誰ひとり居ません！（よ

ね？)

その本会、「日本人(有志)ゴルフ会」というやぼったい名前がついています。記録が定かでないので分りませんが、発足は凡そ体制変換後の一九九二、三年といった頃ではないでしょうか。ブダペストからセントエンドレの方に向うドナウ河の中の島に、ハイキングコースのようなゴルフ場があったと記憶します。恐らくそこで第一回大会が開かれたのでしよう。構成員は日本からの派遣駐在員。とりわけ単身赴任者が中心となつて、週末の余暇を「打球棒で球を打ち、順々に一八の穴に入れて勝負を争う競技」(講談社・国語辞典)に興じていたのです。

その当時とはにかくゴルフができる喜び。ラフで二ダースものボールを無くそうが、芝生に埋もれた石を打ってクラブを折ろうが、何でも平気だったんだと思います。家族帯同の駐在員は週末になると出張をこし

らえてゴルフ。奥さまや子供たちから大いにひんしゆくをかったのは言うまでもありません。

時は流れて十年ひと昔。当時とはメンバーもゴルフ・コースも、道具類も何もかもが変わりました(本紙の読者で第一回大会に出場した方がいらしたらご一報ください)。現在、

本会の月例会で使用しているゴルフ・コースは下記、年間行事に記載した二箇所。他にも三、四箇所のコースで「勉強会」と称して温泉、ワイン試飲会、古城巡り、カジノなどを兼ねてゴルフを楽しんでいます。

つい二、三年前までは「狂人会」と称して「超」と名のつく、いや「狂」と名のつくゴルフ気違いが集まっていました。本人の名誉のために予め言っておきますが、こういう人たちは仕事も一所懸命するのです。ただ、週末になると身体中が疼くのですね。三度のメシよりもゴルフが大好きなんです。夏時間を利用して朝から三

ラウンド(五四ホール)も周ったり、寒い中を雪合戦とも思えるようなゲームをしたり、水辺のボールを打つつもりが池にはまって泳いじやったり、五〇肩を押して無理して今度はギックリ腰を誘発したり、それはそれはまあ色々、狂人ぶりを如何なく発揮しておったそうです。

いつになっても変わらないのは、ゴルフというその本質。簡単に言ってしまうえば「ボールをあるがままに打つ」というものです。止まっているボールを打つことほど難しいものはない。ゴルフをしたことない方、やってごらんなさい。プロ野球ではあの長嶋茂雄氏が監督時代に打ち方の秘訣を聞かれて「来たボールをガツツと打てばよい」と言ったそうですが・・・、そんな生易しいもんじやない。打つ場所もいつも平らとは限らないんです。ゴルフに関連した諺がいくつもあります。ある人の

曰く「ゴルフって、何度開眼したら本当に開眼するんだろう？」って。ゴルフは「人生そのもの」なんていう人もいます。私なんぞは「ゴルフの道は禅に通ず」なんて言っているくらいです。紙面の都合上、詳しいことは省きますがね、これ以上話を聞きたい方は一度本会にご照会ください。入会随時、男女不問、年齢無制限、年会費不要です。末筆になりましたが、冬の運動不足を補うため、お天道さまの出ている間にテニスやマラソンなど各種運動に励んでおられる方、声援を送ります。

〈筆者コメント〉

下記でお分かりのように、当地ゴルフ界でも女性パワー満開です。Vaci通りを歩く日本人旅行者、いつも旦那さん（とおぼしき）が奥さんの後ろでカメラ片手にうなだれて歩いています。男性諸君、頑張れ！

月例会結果（括弧内は所属。数字はハンディ）

月日	場 所	優 勝		2 位		3 位	
3/27	Pannonia	工藤(TDK)	16	野田(三井)	17	遠藤(TDK)	19
4/17	Old Lake	野村夫人	25	Naoe 夫人	25	三ヶ島夫人	25
5/21	Pannonia	小松(個人)	26	深田(住商)	27	三ヶ島(Clarion)	7
6/19	Pannonia	大沢(日通)	18	三ヶ島夫人	23	小川(大使館)	16
7/24	Pannonia	小川(大使館)	14	伊藤(丸紅)	30	野田(三井)	13
8/28	Old Lake	Naoe 夫人	20	野村夫人	17	岡崎(TDK)	13
9/25	Old Lake	山田(Clarion)	24	賀来(大豊)	6	鈴木(Alpine)	20
10/9	Old Lake	-----		-----		-----	
11/6	Pannonia	-----		-----		-----	

その他の行事

◎ 四カ国対抗戦（欧州、米国、韓国、日本） 五月一日 Pannonia G.C.
今年で二回目の本大会、今年も昨年同様、四位でした。無念！

◎ 「大吉杯」ゴルフ・マッチプレー選手権（通算第六回目）
五月から九月までのトーナメント方式 参加選手 一九名
優勝：野村夫人（通算二回目）
二位：Naoe 夫人
三位：宮岡（住商）

◎ ジェトロ・ウィーン主催による第一回四カ国対抗ゴルフ 一〇月二三日予定
今年初めて開催される邦人によるオーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリーの四カ国対抗戦（於ウィーン郊外）

ロードレースへの誘い

盛田 常夫

今年のブダペスト国際ハーフマラソン大会（九月四日）に、在留邦人四名が参加した。サンシンの菅野さん、JETROの村上さん、日本人学校の飯川先生、そして私の四名である。村上さんは今回が人生初ハーフマラソン。私は昨年に続いて二回目の挑戦。菅野さんは日本でもマラソンを走られている。大会のホームページで日本人参加者を検索して、飯川先生が参加されたのを知った。ドナウ河の堤防で日の丸を振って応援していたのは、日本人学校の生徒だったのだろうか。

この大会は今年で二〇回目。一九七七年から一九九九年にかけて日本のトップ選手が男女とも三連勝し、表彰台を独占した大会である。最近では、九月のレースとしてベルリ

ン・マラソンが注目されるようになり、以後日本のトップ選手は参加していない。しかし、ブダペスト国際大会への参加者は年々増えており、今年の男子個人レースの参加者は男子四二〇〇名、女子は一四〇〇名で、これにリレーの数百名が加わりスタート地点は六〇〇〇名を超える人で埋まった。ハンガリー国外からの参加者は四六カ国一四〇〇名弱。なかでもオランダからは三〇〇名を超える団体参加があった。

気軽に参加できる

ブダペストの大会は国際レースだが、「本ちゃん」選手の参加が少ないので、気軽に参加できる。今大会の男子で一時間一〇分を切ったのは一九名、女子で一時間二〇分を切ったのは三名だけ。これらの「本ちゃん」選手はスタート地点で最前列から出発するが、テープ一枚で区切られているだけで、後は自己申告にしたが

って目標タイムが掲示してあるスタート地点に立つ。チップ計測なので後方から出発しても、タイムをロスすることはない。スタートとゴールに敷いてあるマットを通過した時点で、計測が始まり終わるようになってい

る。さて、我がブダペスト在留邦人選手であるが、初ハーフマラソンの村上さんが一時間四八分五三秒で見事走りきった。飯川先生は一時間四一分四二秒でまずまずの成績だったが、菅野さんは練習不足がたたって二時間一七分もかかってしまった。私は一時間三〇分以内を目指していたが、スピード練習の不足から一時間三二分二九秒に終わった。

男子の優勝タイムが一時間五分五七秒、女子のそれが一時間一六分一〇秒だからトップ選手のレベルは高くない。しかし、全体のレベルが低いわけではない。男子では一時間二〇分を切っても百位以内に入れない

し、一時間三〇分で三九八位だから、国際大会のレベルにある。他方、男子に比べて、女子のレベルは全体的に低く、一時間三〇分を切れば二五位に入る。五歳刻みの年齢グループ別順位も記録されていて、私の記録はS4（五五〜五九歳）部で六位（一〇四名中）であった。

ハンガリーのいわゆる長距離を専門とするランナーは数えるほどしかないが、他種目のスポーツ選手が体力強化を兼ねて、いろいろなロードレースに参加している。さすがにオリンピックでメダルを量産するスポーツ立国だけあって、現役スポーツ選手の走力のレベルは高い。ここが日本と違うところで、日本のロードレースにはマラソン・オタクの市民ランナーが多数参加し、他種目の現役スポーツ選手が参加することはまずない。日本のスポーツ選手はランニングを嫌う傾向がある。

コースは一級品

ブダペストの国際ハーフマラソン（九月）、国際マラソン（一〇月）のコースはほとんど同じで、英雄広場を出発し、アンドラーシ通りから鎖橋を渡り、ブダ側のドナウ堤防道路に入る。ラジヨマーニョシュ橋まで南下し、そこで堤防を上がって折り返す。工科大学前を通って、自由橋に向かうが、途中、工科大学を過ぎたところが一〇キロ地点。自由橋を渡って、経済大学（コルヴィヌス大学）前からペスト側のドナウ河堤防道路に下る。途中、鎖橋の一三キロ地点がリレーの中継点。さらにマルギット橋を越えたところで折り返し、堤防を上がる。

ここでフルとハーフのコースがいったん別れ、ハーフは国会議事堂に向かい、フルはマルギット橋からマルギット島を縦断してオーブダに向かう。モザイク通りで折り返し、堤防道路を鎖橋まで戻って再度ハーフ

マラソンコースに入る。国会議事堂を目指すマラソンの最終コース（フルとハーフ共通）は、国会前から西駅の立体交差を越えて、ウエストエンド横を通って、英雄広場に戻る。数ある世界のマラソンコースでも、

世界遺産の絶景を横目に走るブダペストのコースは一級品。もともと、走っている時には風景を楽しむ余裕などない。というより、アスファルトが平坦でなく、ほとんどすべてのコースで表面が左右に傾斜しているだけでなく、あちこちに小さな穴がある。足をとられないように注意しなければならぬ。実際に走っていると、ブダペストの道路の状況がいかに悪いかが分かる。

走っていて楽しい？

「走っていて楽しいか」と良く質問される。楽しいと思ったことはないが、はっきり言えることは走り終わった後の爽快感がたまらないこと

だ。それは山登りと同じ質のものだ
と思う。要するに、ランニングは「楽
しい、楽しくない」という基準で判
断できる性格のスポーツではない。
そこが球技と違う。スポーツには娛
楽性を伴うものと、そうでないもの
がある。娯楽性を伴わないスポーツ
の価値は、「楽しい、楽しくない」と
いう価値観を超えたところにあると
考えるべきだろう。

いろいろなスポーツをやってきた
が、今、ランニングというスポーツ
が気に入っている。仕事と共通する
ところがある。たとえば、四〇五百
頁もある書物を翻訳する場合、内容
を見渡して、一日に翻訳できる分量
を推し量りながら、完成の予想を立
てる。残された分量を絶えず考えな
がら筆を進めるのは、長距離走のペ
ース配分に似ている。スピードと距
離は相反するものだから、長距離走
ではこれをうまく組み合わせるのが
難しい。レースに至るまでの練習実

績と体の調子にしたがって、現実的
なスピードとペース配分を組み立て
ることが、最適に走り切る条件なの
だ。結局のところ、仕事も同じだ。

私は漫然と走るあるいは泳ぐ、漫
然とテニスボールを打つというのを
嫌う。もちろん、そういう時もある
が、たいがいは一定の目標や意識を
もってトレーニングする。目的意識
のない漫然とした遊びは極力避ける。
ランニングマシン上でも、毎日同

じメニューをこなすことはない。ス
ピードに重点を置く練習か、距離に
重点を置く練習かを決めてから走り
出す。故障を避けるために、体の調
子に応じて、臨機応変にメニューを
変える。そのために、いくつかの練
習パターンを用意している。

ひとつのレースに参加するのはひ
とつの計画を実行するようなもので、
レースそのものよりも、そこへ至る
プロセスの方が重要だ。野口みずき
が良いことを言っていた。「走った距

離は裏切らない」。球技で良くあるよ
うな偶然や奇跡はランニングでは起
こりようがない。小出監督は、「走力
は走ることではしか付けられない」と
も言っている。要するに、レースで
は練習しただけのものしか出ない。
もちろん、練習したものをもっと引
き出すためにはペース配分のような
レースの駆け引きが必要だが、練習
タイムを驚くほど短縮するような結
果が生まれることはない。これは人
生と同じ。仕事にせよ、勉強にせよ、
神頼みで日頃の鍛錬以上の成果を期
待してはならないという厳然とした
事実が突きつけられる。こう考える
と、ランニングは人生修行のような
ものかもしれない。一人スポーツは
哲学的な性格をもっている。

故障と付き合う

ランニングだけでなく、他のスポ
ーツでも怪我や故障は付き物。テニ
ス肘で一〇年以上も苦しみ、スキー

で亜脱臼や挫傷を繰り返し、今はランニングで両膝の故障に苦しんでいる。中学時代に腰を痛めて以来、各種スポーツで故障から解放されたことがない。故障と付き合うことが日常化している。故障はスポーツを止める口実になりがちだが、私は怪我で止めようと思ったことはない。

また、ちよつとのことですぐ病院に行く人がいるが、私は余程の重傷か、手術が必要でない限り、まず病院に行かない。ほとんどの場合、医者に診てもらっても治りが早くなることはないし、専門医でなければ、自分でもできる治療しか受けられないからだ。これまでの経験から、膝、肩、腰、肘などの専門医でスポーツ経験のある医者でないと、有効な治療やアドヴァイスができない。手術ができないものは、湿布やマッサージ、テーピングで処置するしかないから、病院に行くまでもない。ハンガリーの病院の順番待ちは精神衛生

に良くないから、なおさらである。

今年は故障回避に細心の注意を払い、順調にトレーニングを進めてきた。一〇キロ四〇分のペースにギアアップし、これからハーフマラソンの準備という六月初めに、重症の痛風の炎症に見舞われた。いったん炎症が出ると、痛止めを飲む程度の療法しかないから、ここでも医者は役立たない。ほとんど一〇日間、歩くことがままならず、まともに走り始めることができたのが七月上旬だった。この時点で、ハーフ九〇分の目標は非現実的になった。

長距離走を始めて二年と数ヶ月になる。せめて一〇年早く始めていれば、もっとタイムを縮めることができると思うが、今は加齢と競争しなければならぬ。ただ、まだ余力があるので、ハーフ八七・八八分まで記録を伸ばせると思う。しかし、それには距離ではなく、スピード練習に重点を置くトレーニングに切り替え

なければならぬ。問題は、若い体で、怪我を予防しながらどうやってスピード練習するか。それが難しい。また一年かけて、体を作っていくことになる。

二〇〇六年の予定

来年の主要なロードレース予定は以下の通り。個人レースあるいはリレーで参加を希望の方は、連絡ください。まとめて参加申込みします。

四月九日 T-Com 一二km走

五月七日 Normaファーフマラソン

およびリレー

五月二〇日 Libresse 女子六km走

六月四日 K&H マラソンリレー

六月一日 ブダペスト一〇km走

九月三日 国際ハーフマラソン

一〇月一日 国際マラソン

一〇月一五日 女子一〇km走

この他に、いくつか大会があります。

テニスサークルへの誘い

セーブヴルジ

日曜テニスサークル

セーブヴルジ日曜テニスサークルは、もともと上級者の集まりとして発足した長い歴史を持つテニスサークルですが、参加人数もレベルもその時々でかなり変化しています。他の日本人の方のテニスサークルがワキアイアイとしているのにたいし、かなり殺気立っているのが特徴です。というのは冗談ですが、お互いのヘボプレーに対して愛を込めた辛らつな批評をしあうのが伝統となつていきます。最近はみんな優しくなつて、以前のような激しさがなくなつてきたかな、という感じですよ。

そうした変化のなかでも一貫しているのが、テニスをこよなく愛するテニスマニア、テニスフリークの集

まりだという点。家族とのイベントや恋人とのデートよりテニスの方が大事！という人が多そうな気がします。

この秋には、メンバーの帰国などが重なり、毎週四人の確保が難しそうなことから、他のクラブへの吸収合併も検討されました。しかし、日曜テニスの伝統を消してはならん！四人集まらなければシングルスでもいいじゃないか！というマニア魂で一致団結。今後の発展を誓い合っているところですよ。

そう、日曜クラブのもう一つの特徴はシングルス好きなどころです。参加者が例え二人や三人でも「今日はシングルスができる」と気持ちを切り替えてやっています。

セーブヴルジ通りにあるカーペット屋内コートで日曜一七時から一九時まで（茂木昌記）。

ヴァーロシユマヨリ土曜日テニスサークル

土曜日テニスサークルは現在、会員一〇名。土曜日午後、モスクワ広場の近くにあるヴァーロシユマヨリ・テニスクラブにて活動しております。このサークルは一〇年近く前に富士フィルムに勤務されていた馬場さんが上級者の集まった日曜日のレベルに達しない中級者のためのサークルとして発足しました。上級者を目指したい人たちが集まったとあって、向上心をもってテニスをされているのがこのサークルの特徴です。そのため練習時間は三時間と他のサークルより一時間長く、コートも二面確保しています。また長時間の練習で体を痛めないように腰膝への負担が小さいクレーコートにてプレーしています。真夏の炎天下でテニスをしているのが私たちだけという事が結構多いです。それだけみんなテ

ニスが好きです。

このサークルの魅力は会社や国という枠を越え、和気藹々とした雰囲気の中で思いっきりプレーできることです。お互いナイスプレーを賞賛し、本人が気づかない点をアドバイスし、そして試合終了後には健闘を称え握手してゲームを終えるというのはすがすがしい気分です。

二〇代から六〇代まで幅広いですが年齢を感じさせないプレーを見ていると童心に帰って楽しめます。各メンバーの努力の甲斐があつて年々技術は向上し、日曜日テニスの方々と交流試合を行えるレベルに達しました。

コート以外でも交流は深く、年に何回かは飲み会を開いております。昨年は週末合宿を行いました。テニス以外でも話が盛り上がり、閉店時間ギリギリまで話が尽きないです。テニスを通じて様々な境遇を持つ人々と交流できるこのサークルは殺

伐とした社会のオアシスです。幹事としてこのような憩いの場をいつまでも守り続けていきたいと思っています（杉本康志記）。

ヴァーロシユマヨリ日曜テニスサークル

二〇〇一年に二人から始めたこのグループも、メンバーが入れ替わり、気が付けば一三人になりました。現在は女性三名を含み、初心者を中心に和気藹々と楽しむテニスを実践中。日曜日九時から一時までヴァーロシユマヨリ・テニスクラブでやっています。参加者の要望に合わせて、たまには飲み会もあります（村上義記）。

以上のテニスサークルへの参加は、直接、それぞれの幹事へご連絡ください（編集部）。



ハーフマラソン参加記

みんなで生涯スポーツを

飯川 浩二

日本人学校の教諭として派遣されて五ヶ月。二〇〇五年の九月四日、私はブダペスト国際ハーフマラソンに参加した。次の週には、日本人会と日本人学校共催の初の運動会が予定されており、その練習や準備の真っ最中のことだった。私は日本人学校側の担当になっており、余裕のない毎日を過ごすであろうことは承知していたが、この大会に参加することは必ず運動会をはじめとする学校の仕事にも生きるはずだと、六月にはインターネットを通じて申し込みを済ませておいた。

私がマラソンを始めたきっかけは、

草サッカーの試合前半で足がつつたり、息があがったりすることが年々多くなってきたからである。体力の低下に歯止めがかららず、仕方なしに週末の早朝、近所を走り始めるようになった。七、八年ほど前のことである。長い距離を走ること自体は、私の父が六十歳を超えた今でもトライアスロンに参加するくらい遺伝的に（？）好きなのだが、やはり目標がないと続かない。そこで、父に誘われて地域の二〇kmの大会に参加することにした。最初の頃は、「前の年より速く走りたい」という思いに駆られ、年々練習量が増えていった。やりすぎと思われるだろうが、子どもが保育園に入る前までは、職場へ走って通勤したこともあった。

ちなみに、本来の目的のサッカーの方には、マラソンはほとんど役に立たなかった。基礎体力の向上という面では効果はあっただろうが、いくら草サッカーといえども、ダッシ



参加者で埋まるドナウ河堤防道路

ユ、ストップ、ターンの繰り返しや長いパス、速いシュートには「速筋」が必要で、マラソンで鍛えられる「遅筋」とは本質的に異なるもののようなのである。ここで余談を一つ。マラソンを始めてから知ったのだが、運動前後に飲む「アミノ酸」は、疲労を押さえ、たまった疲労を素早く回復させる働きがあるのだそう。それからというもの、私は激しい運動の前後には必ず「アミノ酸」を飲むようにしている。

さて、ハーフマラソン当日。運動会でも着た、青いサッカー日本代表ユニフォームに身を包み（日本では絶対にしないことでも、ここではいとも簡単にできてしまうのが不思議である）、心密かに「日本代表」としての気合いだけは十分になっていた。しかし、実のところ「この日のために練習を積み重ねて」というわけにいかず、一抹の不安もなかったと言

えば嘘になる。大会に向けてした練習といえ、自宅からマルギット島、そこで足に優しいラバーの上を一周し、また自宅に帰るおよそ一時間のコース。それを週に一回走る程度である。運動会に向けて「南中ソーラン」やリレーの練習に励む児童生徒のようにはいかなかった。本番のコースも地図で確かめるくらいで、甘く見ていたと言わざるを得ない。

スタートしてみると、すばらしい景色と家族や友人の応援にすっかり練習不足だということを忘れ、「これぐらいのペースでも、いけちゃうかな？」と錯覚。半分を過ぎた鎖橋の辺りで既に、事前に飲んだ「アミノ酸」の効き目も失せ、脚にきはじめた。後半の西駅前での立体交差を上る頃には、あまりの脚の重さに、「勘弁してえ」と心の中で叫んでしまった。それでもなんとか完走できたのは、家族や沿道の応援と、ブダペストの大会で走っているというこの上ない

喜びに後押しされたからに他ならない。

学校体育では、「生涯体育」、「生涯スポーツ」という言葉が叫ばれて久しい。学校教育活動の今日的な課題のひとつに、「生涯学習の基礎を培うこと」が挙げられている。体育科において、生涯にわたって明るく豊かで、活力ある生活を営む態度の育成を目指していくことから「生涯スポーツ」及び「健康の保持増進」の基礎を培うことが求められている。

実際の体育の授業では友達と共に多くの運動経験をし、技能を高め、健康に対する知識を学ぶが、学校教育から卒業し社会に出てからも、一生を通じてスポーツとかかわれる人間を育成することも体育の目的の一つなのである。様々なスポーツを経験してこそ自分にあったスポーツを選択できる。得意だから、楽しいから、気持ちよいから等は、経験して

初めて気づくものである。私も体育の授業では「生涯スポーツ」の観点をいつも念頭に置き、子どもたちの指導にあたるよう心がけている。

私がマラソンの話題を人に熱く語ると決まって「何のために走るの?」とか、「お金を払ってまで走るなんて」、「やせる?やせない?」の話になるが、人それぞれ好きなスポーツがあつて然り。一生を通じて自信をもって続けられるスポーツがあることは幸せなことだと思う。本校には他にも野球やフエンシング、バスケット等をする同僚がいる。教える立場の者が率先して「生涯スポーツ」を実践することはとても大切なことだというのが私の持論である。

そして、次の週の運動会も無事終了した。クラブ運営や大会の開催など、地域社会による場の設定は生涯スポーツにおいて極めて大きい役目

を担っている。今回のブダペストの運動会を振り返ってみると、子ども達にとっては、短距離走やリレー等、競争する楽しさが味わえる種目と、パン食い、「南中ソーラン」のように運動そのものが楽しいと感ぜられる種目の両方を経験できるよい機会であつた。そして一般の方にとっては、子どものように走り回ってスポーツができる貴重な場でもあつた。ブダペストの運動会はまさに生涯スポーツに対し大きな役割を果たしていると言えよう。加えて運営、準備には多くの方々に快く参加していただき、共にこの運動会を作り上げていく中で、改めてすばらしい国に派遣させてもらったと感じた一日だった。

何をかくそう、この時期を境に、応援専門だった私の妻もマルギット島を走り始め、生涯スポーツに一歩足を踏み出したところである・・・。



練習不足に苦しむ

菅野 修

九月四日当日の朝、五時三五分に家を出、体のアップを兼ねてケチケメート駅までの3km強をゆつくりジョギングしながら行く。まだ暗い。道中、夕べから飲みつづけていたのであろう何組かのグループとすれ違ふ。これから帰って寝るのだろうか。

昨年、別の大会ではあったが、同じケチケメート駅からブダペスト行きの列車に乗ったつもりが、同駅で切り離される別の方面行きの車両に乗ってしまい予定時刻より二時間遅れるという苦い経験をしたため、今年には慎重に車両の行き先を確認して列車に乗り込む。座席に着いて列車が動き出すとホットひと安心と列車の振動で瞼が重くなってきた。「折角身体をアップしたのに・・・」と頭

をかすめたがそのまま西駅まで熟睡してしまった。

ヘリアホテルで、お誘いいただいた盛田さんや村上さんと落ち合い、入念にストレッチをして、いざスタート地点の英雄広場へ。

ハンガリーのランナー人口はまだ少ないと思っていたが、英雄広場周辺には、結構な人数のランナーがウォームアップしていた。スタート／ゴール地点は広場の後ろにある公園の中で、盛田さんから、「英雄広場がゴールと思って走ってくると、そこから先まだ1kmあるから、つらいですよ」と注意を受ける。

ランナーはそれぞれ自己の予想タイム順に並びスタートを待つ。スタート時間（一〇時）一〇秒前から皆でカウントダウン、三、二、一、〇：、しかし隊列はびくとも動かない。六千人近いランナー、それも自分は後方に並んでいるのだから動き出すに

漸くゴールという瞬間



は時間がかかる。結局スタートラインを越えるまでに五分の時間を要した。ただ、ランナーは皆、靴にランナーズチップ（ICチップ）をつけ、正確にネットの時間を計測してくれる仕組みになっているので、このロスは心配不要である。

コースは英雄広場からアンドラーシ通り、鎖橋を渡りブダ側河岸を走り、自由橋を渡ってペスト側河岸を走り英雄広場の先の公園に戻るとい

う景色を充分に楽しめるコースである。この大会の魅力の一つである。しかし実際に景色が楽しめたのは、最初の5km程度で、二五℃前後の暑さと六〇%の湿度のため身体が冷えず、思うように足が動かない。エネルギーが消耗していくのが判る。コース途中の会社仲間の応援やジャズやロックの生バンド（日本の大会では、よく〇〇太鼓といった応援がある）の応援に元気づけられ、更に後半に通過した広場では外国人ランナーということで「シュガノ・オシヤム・ヤーパン」とマイクで声援をもらい、途中何度かは歩いたものの何とかゴールすることができた。非常に苦しい大会であった。結果も過去最低。

今回参加してみて感じた日本の大会と違いは、子供が結構走っていること。日本ではハーフマラソンの参加資格は高校生以上となっていたと思うが、本大会は一二歳以上。この

年代から走っていれば、将来は世界と競えるマラソンマンが出てくるのではないか。もう一つ違う点は、記録計測用として靴につけるランナーズチップ（ICチップ）で、日本だと大会事務局から借りる形を採っているため、忘れて家までもって帰ってしまうケースが多々あるようだ。本大会では、いったん五千円^円の借り賃を払い、レース後に払い戻してもらう仕組みである。レース後に思考力が多少低下していたとしても、五千円^円は忘れない。回収率は百%に近いのではないだろうか。というところでゴール裏のテントでは、昔バスの車掌さんが持っていたようなカバンを腰につけた大会関係者が、カバンの中に一杯詰まったお札とチップとの交換を手際よく行っていた。

最近、年齢的なものと練習不足からレースに出られることだけに満足し、タイムが参加の度に悪くなることが気にならなくなってしまった

いた。今回、同年代の盛田さんが私より五〇分近く前にゴールされていることを知り、大いに刺激を受けた。来年は景色が楽しめるように練習を積んで望みたい。



ロードレースに填った私

村上 義

私は昨年から通算五回、ブダペストで開催されるロードレースに参加しています。ハンガリーに駐在する前はロードレースに参加した経験は全くありませんでした。学生時代はアルペンスキーをしていましたが、会社に入ってから定期的に運動することを止めてしまい、随分と体力が落ち、体重も増えてしまいました。

二〇〇二年四月にハンガリーに単身赴任することが決まった折、嘱託医師から食生活の節制と共に、定期的な運動を勧められました。そのためハンガリーに赴任して直ぐに、週末にテニスをするグループに加えて頂いたのですが、テニスは全くの素人なため、運動らしい運動となりませんでした。一年ほどして、案の定、体重が増え始めたため、とりあえず

一番手っ取り早くお金の掛からないジョギングを始めることにした次第です。

コースはマルギット島の周回コースを選びました。市内の公園に比べて近くに樹木が多く、車が走っていないため空気が綺麗なのと、土曜日の午前中などは多くのジョガーが走っているの、寂しくないのが気に入りました。始めは体が慣れていないため、息が苦しく、一周（五・四キロ）するのがやっとでしたが、そのうち走る筋力もついてきて、汗を沢山掻くことが快感になってきました。

走り始めて一年くらい経った時、盛田さんが『ドナウ通信』で駅伝チームを組むので、参加者を募集している記事が掲載されました。そろそろただ走っているのではなく目的が欲しかったので、思い切って参加することにしました。最初に参加したレースは国会議事堂をスタート・ゴ



一息吐くゴールの瞬間

ールとする一人七キロの駅伝大会でした。それ以来、普段は車でしか走れない道路を独り占めするような感じで走れること、沿道の観客から受ける応援、良いタイムが出た時の達成感が気持ちよくて、レースに出ることに填っています。

そしてさらに速く走るために、馬拉ソングッズも揃えることになりました。タイムを計るための腕時計、市民馬拉ソランナー用のシューズ、通気性が良いウェア、股がすれないようなパンツ、最近では膝の靱帯を補強するための薬も飲んでいました。「薬を飲んでまで走ることはない」と妻は呆れていますが、本人は学生時代に味わったレーサー気分を結構楽しんでいます。

さて、九月四日に行われたハーフ馬拉ソンですが、一ヶ月前から数回一〇〜一五^キを走って準備はしてきましましたので、二一^キを完走する自信はありました。出来たら二時間を切

りたいと思っておりました。ただ九月が近づいてくるとブタクサの花粉による花粉症の症状が激しくなり、大会前日も鼻がつまり息苦しくて四時間弱しか眠れませんでした。

当日一〇時のスタート時点には六千人近いランナーが並びました。私は遠慮して後ろの方に並んだため、スタートゲートに辿り着くまで五分钟左右い掛かりました。駅伝大会の際には、いつもスタート時点で場を盛り上げる太鼓隊の脇を通り抜け、私はスタートしました。

いつもは最初に飛ばしすぎてしまうのですが、今回は前を走るランナーの数が多すぎ簡単に抜けないので、結果的にスピードは抑え気味となりました。走り出してみると、あれだけ詰まっていた鼻が通り始め、息が急に楽になりました。最初の五キロはアンドラーシ通りから鎖橋までを走るコースでした。いつも車で抜けていく通りを、実際に走ってみると

風景が違って見えるので不思議です。鎖橋近辺は観光客が多く、沿道から沢山の声援を受けました。調子に乗っていたためか、予定していたタイムよりも一分以上も早くラップを切っていました。私は途中で息切れすることを感じながら、行ける所までこのペースで行こうとそのままペースを落としました。

鎖橋を渡りドナウ川沿いをバツチャーニ広場に向けて走り、途中でウターンしてゲレルトホテル前を抜けていく。ブダペスト工科大学の前を走ってインフォパークの先まで行って折り返す。途中でハンガリーの歌謡曲をスピーカーで掛けながら走っているおじいさんがいて、周りのランナーはクスクスと笑いながら脇を走り抜けていきました。またハンガリーの企業が揃いのTシャツを着て三〇人くらい参加していました。沿道の応援部隊もその倍くらいいました。

自由橋を渡ってブダ側に戻り、川沿いの道をマリオットホテル、インターコンチネンタルホテル、国会議事堂の前を掛けていく。この時点でトイレに行きたくなって、途中にある仮設トイレに入ったため一分くらい損をしました。実はスタート前にトイレに行こうと思ったのですが、長い行列があつて諦めたのです。体内の水分は汗で流れると勝手に思っていたのですが、走るたびにトイレに行きたくなっていました。しかしトイレに行った後は体が軽くなって、逆に走りやすくなりました。

社会党本部前でＵターンし、国会議事堂の後ろに出る。その後バーチジリンスキー通りまで直進する。この国会議事堂前の通りは後ろから風を受けるので、追い風となりとても気持ちよく飛ばせました。ここには給水所もあったため、水を取り、頭から掛けました。これでまた気分が一新されました。

国会前通りをバーチジリンスキー通りに突き当たると左折して西駅へ向って橋を渡って降りる。その後ウエストエンドシティセンターの前を抜け、その先で右折し、西駅から発車する列車の線路の下を潜って英雄広場へ。英雄広場を一周して、セーチェニ広場脇がゴール。タイムは手持ちの時計で一時間四八分。予想よりもかなり良かったので、自分でもびつくりしました。さすがに体が消耗していたためか、ゴール後に貰うアイスクリームやジュースが特別美味しく感じました。

運動不足を補うために始めたジョギングがハーフマラソンを走るところまで填ってしまいました。これまで走ることが継続出来ているのは「レースに参加する」というモチベーションと、自分の体調に合わせて無理をせず楽しむことを心掛けていたためだと思います。お陰で今では走ることが自分の中のペースメー

カーとなつて、これまで特段大きな病気をすることなく、単身赴任生活を比較的健康に送ることが出来ます。これからどれだけハンガリーに居られるかわかりませんが、これからは出来るだけレースに参加し、ブダペストの街を駆け抜けて行きたいと思っています。



会社紹介

アルパイン・マニユファクチャ
リング・オブ・ヨーロッパ

谷中 政則

ブダペスト中心部より、ウィーン方面にM1高速道路に乗り、TESCO, AUCHANといった巨大スーパーマーケットを左右に見ながら、車を約一〇分程度走らせると、ALPINEというブルーのロゴのついた約百メートル四方の白い平屋の建物が見えてきます。このBiatorbagyで当社は、車載用のオーディオの組立を行い、これを主にドイツに販売しています。従業員は約一四〇〇名です。

当社が設立された一九九九年当時を振り返ると、工場の敷地は元々は農地で、周辺に、これといった商業

施設もなく、のどかな場所で、工場の遊休用地の草取りをするにも、周辺農家の羊を敷地内に招き入れ、草を食べさせたこともあったと聞いています。そのような、ほのぼのとした風景も、今となっては遠い昔のことのように、急激な経済発展の恩恵によって、周辺地域には、巨大スーパーが立ち並び、最近、ブランドの洋服を大量に販売するアウトレットもオープンし、いわゆる工場地域というよりは、都市近郊の商業地域に工場があるといった感じ です。このような場所柄、駐在員にとっては、ブタペストからの通勤も近くて便利、妻からの緊急電話があれば、帰りに24時間営業のTESCOで、買い物もできるといった、工場に勤めるものとしては、恵まれた環境にあると言えます。

そのような環境にある当社の課題ですが、まず第一に、雇用問題で、

如何に、良質の作業者を採用、維持するかという点です。当社も日本の製造企業の例外ではなく、現場主義をモットーとしており、作業者一人一人が現場教育を通じ、品質／改善の重要性を理解し、「ものづくり」をすることを事業の推進力としています。そのような、良質の作業者を多人数維持するには、従業員に長い間働いてもらうことが必要となります。

しかし現状は、それと対極にあり、多くの離職者とその補充の採用、それに加え増産によるさらなる人員確保に苦戦しているところ です。もともとハンガリーでは、日本型の長期雇用が期待できない上に、都市近郊の商業地域となってしまうている当社の周辺地域は、ほぼ完全雇用と言われており、さらに状況を難しくしています。実際、作業者を教育しては、会社を辞めていくありさまで、現状維持をするためにも、多くの労

力が必要となっています。このように、周辺では、人員確保が困難なため、会社で多数のバスを手配し、遠方から従業員を多く採用しています。但し、これにはバス運営によるコスト負担の上昇、遠距離通勤の負担による従業員の離職という問題があり、ハンガリー国外からの採用も行っています。

上述の問題に加え、従業員出勤率の課題があります。当社の組立工程は、労働集約的なもので、人による組立て作業が基本となっています。よって、安定した生産を行うためには、作業者が予定通り出勤することが必要なのですが、予定通りに出勤してこない人も沢山いて、まずは始業の朝七時半から、すぐに作業ができません。まず朝、管理者は、誰が休みか確認して、出勤している人員で、如何に製造ラインを編成するか頭を悩ませることになります。他にも、残業時間枠の少なさ、有

給休暇の完全消化の義務等、日本と比較して、労働者にとって厚遇されている点も多く、これも会社にとっては、頭の痛いところ です。

雇用以外の面では、税制に関する問題が挙げられます。ハンガリーがEUに加盟した二〇〇四年五月一日以降、多くの税法改正がありました。その中には、法律の施行が突然で、条文の整備も不十分なため、本来、課税されるべきではないものも課税対象となってしまうことや、VAT還付の延長等、企業運営にとって不利なものもありました。ハンガリー国家財政が良くないことが影響しているように思われます。

このように、いろいろと問題点を挙げましたが、ハンガリーも悪い所ばかりでなく、良い所も沢山ありますので、ハンガリー・スタッフと共に、事業の成功を通して、少しでもハンガリー社会への貢献が出来ればと思っています。

Alpine F# Status 製品ラインナップ



4 チャンネル
パワーアンプ



コンポーネント
3 ウェイスピーカーシステム



コンポーネント
2 ウェイスピーカーシステム



専用サクセサリー



DVD/CD デジタル
トランポートヘッドユニット



インダッシュ 7.0 型
ワイド VGA モニター



マルチメディア
マネージャー



D/A コンバータ

日本人学校児童作文

運動会特集

かっこいいソーランおどれたよ

一年 あだち じゅんや

にちようびに、ソーランをおどりました。かっこよく、おどれました。はつぴをきて、ひらひらしておどりました。ぴしとおどりました。

おかあさんに、ほめられました。

一いだったぜんこうリレー

一年 いいかわ はるか

にちようびに、うんどうかいをしました。ぜんこうリレーで、トップでした。うれしかったです。

あしを、いっぱいうごかしました。うでも、いっぱいうごかしました。ばとんを、すぐみぎからひだりにもちか

えました。はやくはれました。いっぱいはしりました。いっぱいはしって、つかれました。

じぶんのばんがおわったら、「がんばれ。」

とおうえんしました。

はじめて、じぶんのきんメダルをとりました。うれしかったです。

かっこよくおどったソーラン

一年 ほりかわ ゆきと

にちようびに、うんどうかいをしました。ソーランが、じょうずにできました。はつぴをきて、おどりました。はつぴを、ひらひらさせました。せなかも、ひくくしました。だから、かっこよくできたとおもいました。

せんせいに、ほめられました。うれしかったです。らいねんは、もつとちがうふうにかっこよくできたらいいです。

まけてくやしかったたまいれ

一年 みうら りょうた

たまいれで、二かいかちました。たかくなげました。だけど、五こしかいられませんでした。かごをめがけてなげたけれど、ずれました。くやしかったです。でも、ママとパパにほめられました。

うんどうかいには、あかぐみがかちました。くやしかったです。らいねんのうんどうかいには、かちます。

たまいれ 二かいまけたけど

一年 みやなが かずは

にちようびに、うんどうかいがありました。うんどうかいで、たまいれをしました。とんで、たまをいれました。かごのなかにいれました。がんばって、やりました。

またやりたいです。

いっぱいはいったたまいいれ

一年 むねむら じゅんのすけ

たまいいれで、二かいかちました。なげるときは、うえのほうになげました。かごをみてなげました。いっぱいはいって、うれしいです。

四かいぐらいかてたら、よかったです。でも、二かいしかかてませんでした。たまいいれが、できてよかったです。でも、うんどうかいはまだけました。らいねんは、かちたいです。

まけちゃったたまいいれ

一年 おんだ いきこ

さいしよはかっていたけど、ぎゃくてんしてまけてくやしかったです。ちからいっぱい、うえになげました。かごにむかってなげて、はいりそうになったり、はいりそうにならなかったりしました。こんどのうんどうかいはい、かつぞとおもいました。

大きなこえでいえました

一年 しまたけし

大きなこえで、かいかいのことばをいえました。とても、がんばりました。となりのひとにまけずに、大きなこえでいえました。れんしゅうより、とてもうまくなつたとおもいました。すごく大きなこえで、いえたとおもいました。しせいも、とてもよかったです。

パンくいきょうそう

一年 わたなべ れいな

ぱんくいきょうそうで、二いになりました。いっしょうけんめい、はしりました。かつように、いっしょうけんめいがんばりました。あしをいっしょうけんめいうごかしました。くちでパンをかみました。てをがんばってうごかししました。がんばって、てをふりました。また、パンくいきょうそうをやりたいです。

まけてくやしかったリレー

一年 せきぐち まこと

リレーをしました。二ばんをとりました。バトンを、しっかりもちました。あしを、はやくしました。スピードを、だしました。四ねんせいが、はよかったです。

いっしょうけんめいはしったよ

一年 ひろせ すずか

にちようび、うんどうかいがありました。わたしは、たんきよりそうでした。ちばんさいごになってしまいました。いっしょうけんめいはしって、いっしょうけんめいてをふつたのに、いちばんさいごになってしまったのでとてもくやしかったです。らいねんのうんどうかいでは、ぜったい一いになりました。

運動会と友達

四年

大島 優

あ、初めて見る子だ。

「バーン」

ピストルが鳴った。スタートだ。

今日は楽しみにしていた運動会。

天気は晴れ時々くもり。今は短距離走。たった今、第一走者が走り出した。そしてあつという間に私の前の組がスタートした。

「初めて見る子」というのは補修校の子だ。とても話しやすくて始めて会った気がしなかった。でも、名前は知らない。いっしょのチームにはならなかった。敵といえば敵だから。

「位置について、よいい『ぼくん』私の番だ。みんないきおいよく走った。途中ぼうしがとれそうになったので直した。

「ゴール」

みんな次々にゴールしていく。

「やったー。一位だ」

私は一位でゴールした。でも後から父に

「よそ見をしちゃだめだ。ぼうしを直すのも後でいい」

と言われてしまった。よく考えると父の言うことももっともだ。今度からは気をつけよう。

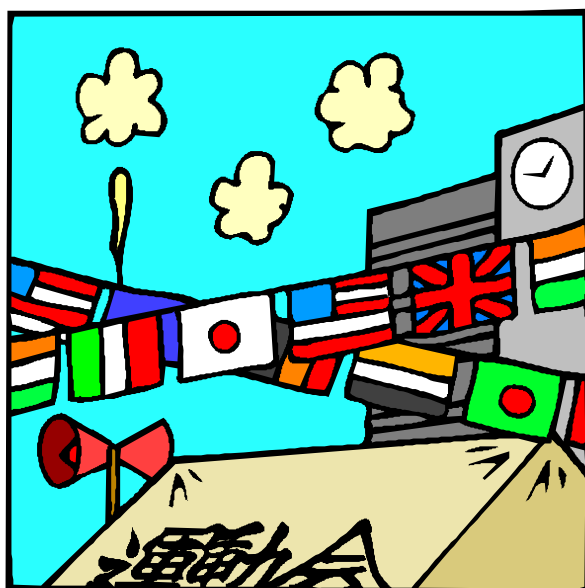
どんどん競技が進む。私はパン食い競争でも一位だった。パンの中心はジャムだった。

お昼が終わり午後の競技が始まった。はじめは「南中ソーラン」だ。練習ではすごく長く感じた「南中ソーラン」が、本番ではあつという間に終わってしまったように感じた。

その後もどんどん競技が進み、もう閉会式。結局私たちの組は負けしてしまったけれど、銀メダルがもらえてうれしかった。来年こそは絶対に勝ちたい。

ところで、初めて会ったあの子は結局名前を聞けずじまい。ちよつと

残念。でもまたどこかで会えると思う。どこかで会えなくても来年の運動会では会いたい。そのためには少なくともそれまでハンガリーにいてほしい。



パン食い競争がんばるぞ！

五年 谷中 未沙

運動会の一日前のことです。私のお母さんがパンを買ってきました。それも私が大好きなパンです。私が食べようと思ったら、お母さんが、「だめ。パン食い競争の練習するんだから！」

と言ったので、私が、

「どうやるの」

と聞いたら、お母さんが、

「まあ、考えてみて」

と答えました。そして、

「さあ、パン食い競争の練習を始めるよ」

と言って、やってみました。そして、すごく難しかったです。

何回も何回もやりました。そして「少しだけうまくなったかな」と自分で思いました。そして、明日のパン食い競争が楽しみになりました。

大運動会の当日。いよいよパン食

い競争の時が来ました。最初は、五年生のみなが手伝う係りです。パンをつるすロープを持つ役です。そして、それが終わったら、いよいよ私たちの順番です。あやねちゃんと、なおちゃんと、なつきちゃん、りさちゃん、かなちゃんと私で走ることになりました。

ピストルの音が、バンと鳴りました。すぐにパンを取ることができ、私が一番になりました。そのときはすごく興奮しました。

パンを見たら、少し欠けて、ジャムがパンからはみ出していました。それを見たらショックを受けました。

無事、運動会も終わり、私は帰りの車の中で寝てしまいました。そして、私は、パン食い競争で、また一番でゴールした夢を見ていました。



みどりの丘日本語補習校

児童作文

うんどうかい

一ねん もてぎりく

ぼくは、にちようび、レオくんと
のりくんとみおくと、うんどうじ
ようにいきました。

たのしいなっておもいました。

きょうそうとかしました。いちばん
たのしかったのは、うずまきリレー
です。あかぐみがかって、うれし
かったです。



運動会にさんかして

三年 茂木 優

ぼくが、運動会で一番楽しかった
のは、うずまきリレーとパン食いき
よう走です。

うずまきリレーでは、一周をして
もどって来たときに、ジャンプする
ときと、くぐるときが面白かったで
す。ぼくたちは、れん習していない
けど一番になりました。うれしな
かったです。

パン食いきよう走では、その前に
かけっこがあつてちよつとつかれて
いました。走るのはちよつとおそ
かったけど、パンをくわえるのが早
かったので、二番になりました。パン
をとるとき、ひもがゆれていたので
けっこうむずかしかったです。

さい後のリレーは、さんねん
でした。なぜならリレーではさい
後になつてしまつたからです。

ぼくは、白組でした。でも十
点さ

で負けてしまいました。来年は
勝ちたいです。



家族で旅行

竹内 勝則

昨年の夏休み、初めて家族を呼んでブダペスト近郊を歩き回りました。

今年の夏は他の国へ行ってみようということになりました。八月六日から八日までポーランド *Krakow* のアウシュヴィッツ、八月一〇日から一四日までローマを家族と旅行しました。いずれも以前に私自身が訪れた場所です。昨年一〇月に初めてハンガリーから外にでたのが *Krakow* でした。目的はアウシュヴィッツを見ることでした。その後ハンガリーの祝日で三連休になる時などに、一人旅を楽しんでいます。

旅行した時は、必ず絵葉書を買って家族に出しています。出来れば現

地の切手を貼って現地の郵便局で出すようにしています。切手の大きさや図柄も国によって様々であることが分かります。日本に着く迄二週間掛かったこともありましたが、すべて届いています。万国郵便制度という仕組みは立派なものだと感心します。妙齢の妻宛に二枚、高校二年の息子宛に一枚、中学三年の娘宛に一枚ずつ書いています。

最初の訪問先だった *Krakow* からも絵葉書を出しました。今回の旅行先の決定には、私の絵葉書の影響があったかも知れません。息子から「アウシュヴィッツへ行きたい。」との話が出ました。ブダペスト以外で初めてのヨーロッパ旅行先として、アウシュヴィッツへ行きたいとは驚きでしたが、一生に一度ここを見ておくことは大切なことと思い、行くことにしました。

この場所を二度訪ねることはあるまいと思っただけに、再訪する

ことになり身が引締まる思いでした。妻と娘の行きたい所はローマでした。ローマは三月に行ったばかりでしたが、是非再訪したいと思っていましたので、行くことにしました。

Krakow までの便はミュンヘンで三〇分という乗り継ぎ時間しか無かったので遅れやしないかと心配していたのですが、何とか間に合っただけでした。電車じゃないのだから、こんな乗り継ぎ便を選んではいけませんね。

八月六日(土)の昼頃 *Krakow* のホテルに着いてから、チェルトリスキ美術館でダ・ヴィンチの「白テンを抱く貴婦人」を観た後、織物会館にあるたくさんのお土産屋さんを見ました。ダ・ヴィンチの絵は、彼の作品と思って観るからかも知れませんが、他の作者と比べて顔の表情に一種の趣を感じます。

また、教会の長い螺旋階段を上ま

て定時にトランペットを吹いているおじさんの写真を撮ったりして、少々疲れました。天気は雨もようでしたので、市内で夕食を摂った後ホテルに戻りました。

翌八月七日(日)は快晴になりました。朝八時にタクシーでアウシュヴィッツそしてビルケナウに向けて出発し、一時間ほどで到着しました。順路に沿って、じつくりと時間をかけて観て回りました。英文で書かれている文章を読んで翻訳し、家族に説明しました。

ソ連軍によってアウシュヴィッツが解放された時に、七〇Kgで入所した女性が二五Kgの骨と皮になって発見された写真から始まって、毒ガス・チクロンBの入っていた缶のおびたらしい数、三枚だけ残されたという積み重ねられた死体の山を野焼きしている写真、ガス室と焼却炉の模型、たくさんの子供の靴を含んだおびたらしい数の靴や洗面用具の

山、入所後平均三ヶ月で死んでいった人達の顔写真、腐った野菜で作られたスープと石のようなひとかけらのパンの食事、銃殺刑場とその脇にあったリンチ用の棒の先端のフック(両手を縛って吊り下げられると、両肩が抜け何日かすると死んでしまうそうです)、そして首吊りに使われた鉄棒、ガス室とその隣の焼却炉。

ここで写真や現物を見たことは一生涯忘れられない経験になったことと思います。生まれて初めて目にしたこれらの事実には圧倒されてしまい、みんな無口になってしまいました。

次にアウシュヴィッツを離れ、ビルケナウに向かいました。この広大な空間がすべて収容所の施設だったことを理解して愕然としたようです。死者の数百万人とも百五十万人とも言われています。アウシュヴィッツの狭い収容所と百万人という数に奇異を感じていたようですが、百万人という数は本当なのだと判り、ビル

ケナウの広大さと真夏なのに寒々とする景観を見て、かなりショックを受けた様子でした。事実を現場に来て現物で確認することは一番説得力があること、*Seeing is believing.*の感を強く持った一日でした。

ブダペストに戻り、一日休んでからローマを訪れました。娘はボルゲーゼ美術館と公園。昼食は「カフェ・ド・パリ」です。そこでスパゲッティなどを食べた後、ケーキを選んで食べました。大変美味しかったです。代金もそれ相応でしたが。

午後はスペイン広場からコンドッティ通りそしてコルン通りとウインドウショッピングをしました。光りものやら服飾やらバッグやいろいろな店を見て歩きました。

二日目は妻のスケジュールでヴァチカン美術館。ラファエロの間とシステイーナ礼拝堂の「最後の審判」は共に絵の大きさもさることながら、迫力がありました。朝八時半に美術

館前に着いたのですが、多くの人が入場待ちで並んでいました。その後どんどん人が多くなってきました、ものすごい数になりました。それでも朝早くから並んだことで、じっくり観ることができて良かったです。皆その素晴らしさに感動したようです。

三日目は息子の番でフォロローマーノです。コロッセオから始まってヴェットリオ・エマヌエーレ二世記念堂まで、フォロローマーノ・パラティーンの丘を歩きました。残っている建築物の壮大なことにびっくりしていました。

その後チルコ・マッシモの競技場跡を過ぎて、真実の口を見、カラカラ浴場と大いに歩き回りました。規模の壮大さと言いますが、大きさは現場に立ってみて初めて感得出来るものだと思います。

高さ何メートルなどと説明されても実感は沸きません。その建物の下から上を見上げた時に、「何と言う大

きさなのか」と驚きます。みんな凱旋門や巨大な柱を見て、古代をイメージしていたようです。

二千年前と言ったら、日本はまだ縄文時代で稲作も行われていなかった時代です。その時代にこのような建築物がローマに存在していたとは、何と言う歴史の違いなのでしょう。川や海で魚を獲ったりして生活していた時代に、ヨーロッパではローマ帝国があつたとは驚きです。

ここで食事について一言。一人旅では、昼はマクドナルドでビッグマックを食べ、夜は安い中華食堂で焼飯とギョーザという貧しい食事をしていたので、今回は違いました。

豊富な種類のスパゲッティ、カフェ・ド・パリの各種のケーキ、一人ひとりが選んだイタリア料理、海鮮料理、ムール貝の料理とたくさん食べました。家族四人で食べた料理はどれも美味しかったです。

食事は料理そのものの美味しさも

ありますが、それ以上に雰囲気が大事です。家族みんなでテーブルを囲んで食べる食事は楽しいものです。

帰国後に感想を聞いた所、皆アウシュヴィッツには深い思いを抱いたとのこと。ローマについては、娘はケーキとお土産屋さんで噴水、妻はヴァチカンと有名な服飾店での陳列の仕方や洋服のデザインなどにとっても感心したとのこと。

もう二〇年も前ですが、妻は服飾のデザイナーでデパートや専門店の指導もしておりました。その頃のが感覚が甦ってくるようだったと喜んでいました。息子はフォロローマーノの壮大さに感銘を受けたようです。楽しかった旅も終わり、家族も帰り、仕事と自炊の日々が戻ってきました。今年のブダペストの八月は曇や雨が多く、夏とは思えない涼しさが続いています。風邪など引かないように注意して、家族に会える正月までまた半年頑張ろう。

報告

運動会と 第二回ソフトボール大会

運動部理事 伊藤 幸広

おんな心と秋の空。

全く良く言ったものです。毎年この時期のスポーツ行事は、春のソフトボール大会よりも、天気が気になります。春の大会は、途中雨に降られながらも、寒い中何とか全試合終了したのに対し、今秋の大会は雨で半日終了となってしまうしました。全く残念。運動会の前夜も雨で、どうなることや、冷や冷やしましたが、そこは子供達の念力と、皆様方の心の中のでるる坊主で、秋晴れに。大会終了後、片付けも終わった頃に突然

降った大雨が、とても印象的でした。

さて、その運動会。今年は日本人学校と、日本人会の共催とあって、いつもにも増して盛り上がりを見せましたね。かわいらしい一年生の、開会挨拶の元気の良さに笑顔覚え、国旗掲揚では、ハンガリーの生徒さんも、日本の生徒さんも、うまく曲に合わせて揚げる様に感心しました。あらためて両国歌を同時に聞いて、ずいぶん雰囲気似ているな、という新発見もありました。競技は幼児から大人まで、幅広く用意しており、また準備係りの方たちの手際も、とても良かったように思います。ハンガリーの子供たちの身体能力にはただただ舌を巻き、大人たちも裸足で真剣に走るその姿勢に、怪我の心配をしながらも頼もしく思ったものです。昼食の弁当も芝

生の上で食べる事が出来て、本当によかったですね。これも皆さんのでる坊主のおかげ。いつものお母さんのお弁当も、きっと格別の味だった事でしよう。



昼食後の「南中ソーラン」は、当日の一大イベントだった事とされています。午前中から『麦ジュース』の大人たちに比べて、子供たちの体の軽いこと！あんなに何度も開脚屈伸をしたら、次の日起きることが出来なくなってしまうそうです。踊りきるだけでも大変そうなのに、みんなしつかり覚えていて、また誰もが真剣な表情で。かなりの子供が、夏休み後に日本人学校に入学したそうですが、そのわずかな時間で、あんなに完璧にパフォーマンスとして仕上がっているのは、素晴らしい、一言です。子供の晴れ姿を、一心にカメラやビデオに収めるご両親がたの姿も、秋晴れに映えて素敵でした。

何人かに運動会の感想を聞いたところ、何回か見ているけれど、今年が一番良かったのではないか、という感想をも頂きました。ひとえに、準備、当日の競技補助、その他もろもろのお手伝いをして下さった、皆様方のお陰です。本当にどうもありがとうございました。また、印象に残っているのは、子供たちのアウンスとDJです。日本の運動会で良く見た、紋切り型の「放送部アウンス」ではなく、自然な姿の実況中継と、自分たちの好きな曲で運動会を盛り上げるDJ。楽しい運動会を、ありがとう。

第二回ソフトボール大会は、本当に残念でした。第一試合中に顔を出した太陽も、第二試合開始と共に厚くなった雲に覆われてしまいました。降り出し、また止み、また降り、の繰り返し。チームリーダーが集合して、第二試合を続けるかどうか、話し合ったときは、雨も軽くなっていたのに、再開したらまたひどくなってしまう、その後は止む気配もありませんでした。ただ、一試合もしないで終わるチームがあるのは不本意なので、とにかく午前中の試合だけでも終わられて、良かったと思っています。（そして、商工会Bチームの4連覇も、今回は流れましたね。）

「雨の具合によって、五回コールドも有り！審判に任せます。」という話しもあつたのに、やり始めたら、みんな真剣そのもの。勝つ、という事よりは、とにかく試合を終わらせる事に真剣だったのではないのでしょうか。最後の最後まで試合をしていたのは、大使館チームと、日本人学校チーム。六回終了時点で8対8の同点。その時、すでに他の試合は終わっていたのに、どうしても勝負を決めたい、との事で最終回七回をはじめていました。七回表、大使館チームは4得点追加。裏、日本人学校チームは、やはり子供の活力で5得点。

サヨナラ勝ちをしたのでした。日本人学校チームは初戦、大使館は二試合目、と投手の方の疲れも見えて、勝ってしまつて申し訳なかったかも、とは日本人学校チームからの感想。いやしかし、雨足の強いという逆境においては、やはり子供の底力に勝るものはない、と思いました。が、いかがでしょう。

午前中で終わってしまったため、皆さん不完全燃焼かもしれません。が、とにかくベスト4は出ました。毎回、参加費から購入している優勝賞品は、四分の一ずつ、ベスト4チームに授与させて頂きました。ベスト4は左記の通りです。



デンソーくまさんチーム

C & K チーム

日本人学校チーム

商工会 B チーム

また、ご好意で提供して頂いていた、各個人賞賞品は、返還させて頂いたできました。皆さん、来年の春のソフトボール大会は晴れるように、祈りましょう。

今年のスポーツ行事はこれにて終了です。最後になりましたが、手伝って下さった皆様方、本当にありがとうございました。

【大運動会】

九月十一日（日） 晴天

【第2回ソフトボール大会】

十月二日（日）曇り→雨にて
途中中止

